人の本質を描き出す

2021.3.18.日経

一度みたら思わずひきこまれてしまう。「美しい」では言い表せない魅力を持った作品を集めた「あやしい絵」展（東京国立近代美術館、日本経済新聞社など主催）が23日から東京国立近代美術館（東京・千代田）で開催される。幕末から昭和初期までの浮世絵や日本画、挿絵のほか、西洋美術もまじえつつ、作品に秘められた「あやしさ」の謎を読み解いていく。

明治を迎えた日本には、政治、経済、文化などあらゆる方面で西洋から知識、技術がもたらされ、社会は大きく変容した。美術も例外ではなく、新たな思想や表現が生まれ、制作においても実践されるようになった。近代のこうした動きが、「あやしい」絵を生み出す土壌となった。

展覧会には幕末から昭和初期に制作された絵画、版画、雑誌の挿絵など多様な作品が並ぶ。企画を担当した東京国立近代美術館の中村麗子主任研究員は「グロテスク、エロチック、神秘的。こうした作品を一言で表現する際、『あやしい』という言葉が浮かんだ。美しいという言葉には収まらないが、闇の部分を描き出しており、人間の本質を語るものでもある」と話す。

重要なバックグラウンドとなったのが、昔から語り継がれてきた物語や文学だ。説話、歌舞伎、浄瑠璃などのワンシーンに着想を得て、描かれたものも多い。京都で活躍した女性画家、上村松園の「焔」（1918年）もその一つ。紫式部による「源氏物語」の登場人物である六条御息所をモデルとしている。

タイトルが示すように、心のうちに沸き立つ嫉妬の炎が具現化され絵に表されている。前かがみにうつむき、髪をかむ姿から「うらめしや～」という声が聞こえてきそうだ。物語では愛する光源氏が引かれる正妻、葵の上への嫉妬のあまり生き霊となり、殺めてしまう。うっすらと描かれた足元が、女性が人間でないことを示唆している。

藤の花とともに描かれた蜘蛛の巣も不気味さを増幅させる。中村主任研究員は「光源氏や葵の上をからめとるという思いが、象徴的に表されている」と解説する。こうした着物が登場するのは桃山時代からで、物語が書かれた平安時代には用いられていない。松園が物語に現代性を持たせるため、こうしたアレンジを施したという。

目の部分には近くで見ないと分からないほどわずかに絵絹の裏から金の絵具がさしてある。謡曲を習っていた松園が師から「嫉妬する美人を表す能面には白目に金泥が入っている」と示唆を受け、応用したものだ。その輝きは、嫉妬の炎のようでもあり、悲しみの涙のようでもある。

さらに、中村主任研究員は「絵には松園の悔しさも込められているようにも見える」と指摘する。女性画家が珍しかった時代、「同じ画塾の男性の塾生から『君はきれいな絵だけ描いていればいい』と言われたこともあったようだ」（中村主任研究員）。きれいというだけでは語れないこの絵は、そうした言動に対する松園なりの答えだったのかもしれない。物語の背景と松園自身の境遇を知ることで、絵の奥に秘められた思いが浮かんでくる。

大正～昭和にかけて活躍した甲斐庄楠音も物語に着想し